

## 2 社 会 科

上之園強・松田芳明・佐藤 健

### 1 社会科における自立の必要性

国際化、情報化、高齢化、地球環境の悪化等、子どもたちを取り巻く社会は急激に変化しており、今後もさらなる加速化が予測される。子どもたちにとって、これらの社会の変化が自分たちの生活にどんな意味をもたらすのか自分との関わりの中で社会を見つめ、自分自身の生き方に思いを巡らせながら自己を確立していく学習が不可欠である。学習者としての主体性の回復が求められている。

そこで、子どもたち一人ひとりの生活と結びついた学習の充実を図り、「社会を形成する一員として、自ら考え、判断し、行動して、自分たちの生活を豊かにすることのできる力」を育むことが必要だと考える。学習場面においては、子ども一人ひとりが、学習の仕方を習得しながら、自分なりの問題意識と見通しをもち、問題を解決しようとする意欲や態度を育てていきたい。

### 2 社会科における自立と自己決定との関連

#### (1) 自立と自己決定との関わり

社会科部では、自立を、「自分で目的を決めて、それを追究し、その結果を自ら振り返り、新たな目的をつくることで、よりよく生きていこうとすること」と捉えた。課題を自ら選択・決定したり、自らの学習方法を身につけたり、学習したことを自分なりの方法でまとめたりする力が求められる。これらのことは、自己決定力の育成と深く関わっている。学習のあらゆる場面で自分自身で決定していく力（自己決定力）が、自立の中核であると同時に、自立への入口となるからである。

#### (2) 社会科学習における自己決定

社会科学習における主な自己決定は、社会科のねらいに着目した自己決定と学習の仕方に関わる自己決定の2つが考えられる。

1つ目は、社会科学習の究極のねらいである、「科学的な社会認識を形成し、市民的資質を育成する」ことに関連したものである。特に市民的資質の育成という視点からは、社会の一員として社会をよりよくしていくための合理的意思決定能力やよりよい社会を形成していくために未来社会のあり方を創造し、発信していく未来志向に関わる自己決定力等の社会的判断力の育成が大切である。

2つ目は学習の仕方に関わる自己決定である。学習問題、学習内容、学習方法、さらには学習のまとめ方を児童自身が決めることである。例えば、課題別による複線型の学習や個に応じた表現方法の活用などが考えられよう。

### 3 めざす子ども像

以上の考えに基づき、めざす子ども像を以下のように設定する。

- 身の回りの問題や課題を見つけだし、それらに対して自分なりに予想をしたり、友だちと交流したりして、問題意識を焦点化することのできる子ども。
- ◎ 問題解決の方法や内容、手順などの自分の学習計画を具体的に立案し、問題解決への見通しをもつことのできる子ども。
- ◎ 自分なりの解決策に基づいて、資料を取捨選択しながら、課題を科学的に追究することのできる子ども。
- ◎ 学習したことを活かし、合理的に意思決定したりこれからの社会のあり方について自分なりの視点から創造したりすることのできる子ども。
- 学習成果を自分なりの表現方法を用い、工夫してまとめることのできる子ども。
- 学習の過程で獲得した様々な能力（知識や技能等）を次の学習へつなげたり、実生活に活かし

たりすることのできる子ども。

#### 4 「自立に向かう子ども」を育成するための方策

社会科部のテーマに迫るために、次の5点からアプローチを大切にしていきたい。

##### (1) 教材構成の工夫

###### ① 学習内容の転換

従来までの学習は、まず、「分からせたい内容」があり、それをどう子ども達に効率的に「分からせるか」が問われてきた。ここでは、できる限り子どもが自分で決めることのできる場を大切にしていきたい。学習内容を「自分で決める」ことができるように転換していくことが大切である。

###### ② 学習材の開発

上記のことを達成するために、以下のような点に留意し、学習材を開発していきたい。

- ・社会的事象の理解にとどまるものだけでなく、社会的論争問題を内包し価値的判断を促すような内容の広がりのあるものを取り上げる。
- ・「このようになってほしい」「こうあったらいいな」というように、学習したことを発展させて、よりよい街づくりなど、未来の社会のあり方を扱うことのできるものを取り上げる。
- ・環境問題、国際化・情報化など社会の変化に対応した新しい内容を含むものを取り上げる。

##### (2) 学習過程の工夫

###### ① 「めあて追究」の過程の重視

科学的な社会認識の形成と子どもの主体的な学習の保証という視点から、「めあて追究」の学習を大切にしていきたい。「めあて追究」の学習は次のようなステップを踏む。

- ア. 社会的事象に出会い、自分なりの問題を見つける
- イ. めあて追究の方法や計画を立てる
- ウ. めあて追究の方法に沿って個人や集団で追究や吟味をする
- エ. 追究結果を自分なりの方法で表現し、お互いに学び合う
- オ. 自分の追究結果を振り返り、新たなめあてを見つける

###### ② 自分と社会との関わりの場の重視

市民的資質の育成という視点から、「めあて追究」の学習過程に、自分と社会との関わりを図る場を位置づけていくことが大切である。そのために、次の2つの場を積極的に組み込んでいく。

- どうすべきか?…価値判断型の展開(論争問題学習)
- どうしていきたいか?…未来志向型の展開(未来志向学習)

##### (3) 多様な学習活動の取り入れ

実体験や追体験等、具体的で多様な活動や体験を組み込んでいく。

- ・子どもたちが直接対象に働きかけることのできるような調査活動の重視
- ・子どもたちが実感できるような体験的活動の重視
- ・社会参加等、学習したことを活かすことのできる実践的な活動の重視

##### (4) 学習支援と評価

指導していくことを前面に出すのではなく、学習の支援者として、資料の紹介や、学習法方の提示などに力を入れていく。

##### (5) 年間指導計画の見直し

子どもの自立という視点に立ったとき、自己決定したり、課題追究したりする時間を保証していかななくてはならない。そのために、教科内容を厳選していく必要がある。また、社会の要請として将来の学校週5日制を見据えたとき、教科内容のスリム化が必要となってくる。

社会的事象を網羅的に取り扱うのではなく、ねらいの重点化や各教科や人間、環境領域などの「総合的な学習」との内容の関連を図っていくなど、年間指導計画の見直しが求められている。